

# 東海地区における保育者の伝承遊び実施状況と課題

穂 丸 武 臣  
丹 羽 孝  
勅 使 千 鶴

## I 緒言

幼児の教育・保育は、幼児にとって最適な環境を準備し、遊びを保育内容の中心に据え、幼児の心身の発達を保証することにある。したがって、幼稚園教諭・保育士（以後 保育者）による遊びに関わる保育教材研究は最も重要である。

遊びの本質は心理学的に言えば、自発的な内的動機づけによる、楽しさや面白さの追求である。その行動が子どもの意欲を育て、自己の態度を形成する。体育学的には、楽しい知覚 - 運動遊びを豊かに体験することによって身体機能の自己組織化を助長することにある。遊びの楽しさの階層構造として、本能的欲求である動くこと自体の楽しさの段階、新しい動作の獲得による楽しさの段階、それに加えて運動の原則や原理の認識による楽しさの段階、終局的には運動の課題解決能力の獲得による楽しさの段階が考えられる。そして、遊びにおける人との関わり方が付加されると楽しさと遊びの質的变化がもたらされる。

全国の幼稚園や保育所においては、幼児にとって楽しい伝承遊びが保育教材として活用されてきた。伝承遊びには半澤（1980）、笠間（2005）らが示したごとく、奈良・平安時代から伝わっている遊び、終戦後の路地裏遊びとして子どもたちの間で伝えられてきた、比較的新しい遊びも含まれている。

筆者らは伝承遊びについて、全国の幼稚園や保育所を対象に調査し、伝承遊びの実施率は保育者の年代や地域差と関連があったことを報告した（2007）。その後、園種や設置形態による保育者の認識に差があることについても報告した（2010）。

本報告は、前述の調査結果を踏まえて、東海地区における保育者の伝承遊びに関する特徴と課題について明らかにしたものである。

## II 研究方法

1. 研究対象：東海地区（静岡県、愛知県、岐阜県、三重県）の調査対象園の選択に当たっては、『全国学校総覧 2004』と『全国社会福祉施設等名簿（平成 16 年版）』を用いて国立は全園、公私立の幼稚園と保育所は各県庁所在地とそれ以外の市町村から無作為抽出により行った。その内訳は表 1-1 に示した。東海地区の有効回答数は 78 名であった。
2. アンケート調査方法：アンケート質問紙の配布と回収は、郵送によって行った。記入に当たってはアンケートの性格上、年長組の担当の保育者に対して、園長から該当の保育者に依頼した。
3. 調査用紙回収状況と調査期日：調査用紙の発送は 2004 年 11 月 10 日、回収締め切りは 2005 年 1 月 10 日であった。
4. 伝承遊び調査内容と記入方法：アンケート調査内容は、フェースシート(9 項目)、伝承遊び実施状況 (61 項目)、伝承遊びに関する保育者の認識(15 項目)であった。

伝承遊び実施状況の記入方法は該当する番号に○を付記した。アンケート項目の番号 3 の「実施」は、過去 3 年間に園で幼児と一緒に伝承遊びを実施したことがあるもの、番号 2 の「承知」は、伝承遊びの名前や遊びの方法は知っているが実施したことがないもの、番号 1 の「不承知」は、遊びの名前やルール・内容を知らないものである。分析においては、番号に与えた数字の合計点を伝承遊び実施得点として算出した。

## III 調査結果

### 1. フェースシートの質問項目について

#### 1) 調査対象地区について

調査対象園は各都道府県を 8 地域に分類した。地域別回収数とその比率について表 1-1 に示した。関東地区が約 17%で最も多く、ついで北海道・東北地域、九州・沖縄地区で四国と中国地域の順であった。東海地区は 78 園で全体の約 12%であった。

表 1-1 調査対象園の地域分布

調査対象地	度数	パーセント	度数	パーセント
中国地区	60	9.32	60	9.32
北海道・東北地区	100	15.53	160	24.84
関東地区	112	17.39	272	42.24
近畿地区	80	12.42	352	54.66
甲信越・北陸地区	72	11.18	424	65.84
九州・沖縄地区	100	15.53	524	81.37
四国地区	42	6.52	566	87.89
東海地区	78	12.11	644	100.00

欠損値の度数 = 7

## 2) 調査対象の園種・設置形態について

東海地区の調査対象園の園種・設置形態は表 1-2 に示した。国立幼稚園は全体の約 4%、公立幼稚園は約 22%、私立幼稚園は約 19%、公立保育園は約 27%、私立保育園は約 28%、認定子ども園等は約 28%であった。

表 1-2 東海地区の調査対象園の園種・設置形態

	国立幼稚園	公立幼稚園	公立保育園	私立保育園	認定子ども園等	合計
度数	3	17	15	21	22	78
パーセント	3.8	21.8	19.2	26.9	28.2	100

## 3) 調査対象園の地域性について

東海地区の調査対象園の地域性について表 1-3 に示した。

調査対象園の約 60%が住宅地域で最も多く、次に農村地域は約 10%、商業地域は約 9%、漁村地域は約 4%の順であった。

表 1-3 東海地区の調査対象園の地域性

地域の特徴	住宅地域	商業地域	農村地域	漁村地域	その他	合計
度数	47	7	8	3	11	78
パーセント	60.3	9	10.3	3.8	14	100

## 4) 回答者の年齢について

回答者の年齢分布は表 1-4 に示した。アンケート回答者の年齢分布は 45-49 歳の年齢群が最も多く約 27%を占めていた。

保育者の年代分析は 20 代、30 代、40 代、50 代（50 歳以上）の 4 グループとした。

表 1-4 回答者の年齢分布

年齢構成	24 歳未満	25-29 歳	30-34 歳	35-39 歳	40-44 歳	45-49 歳	50-54 歳	55 歳以上	不明	合計
度数	3	18	5	11	11	21	7	1	1	78
パーセント	3.8	23.1	6.4	4.1	14.1	26.9	9	1.3	1.3	100

## 2. 伝承遊び実態調査の結果

### 1) 伝承遊びの実施状況について

(1) 東海地区で実施されていた伝承遊びの実施率が90%以上の項目を図1-1に示した。東海地区の圏で実施率が90%以上の伝承遊びは、20項目であった。全国調査と比較すると伝承遊びは8種目多かった。

東海地区において全圏で行われていた伝承遊びは「折り紙」「カルタとり」「ままごとあそび」「かごめかごめ」であった。遊びの分類では、集団的な運動遊びで「かくれんぼ」「だるまさんが転んだ」「追いかけて鬼」「渦巻きじゃんけん」「尻尾とり」「ハンカチ落とし」など、6項目であった。身体操作系の遊びは「縄跳び」「たこ揚げ」「こま回し」など3項目であった。歌を伴った運動遊びは、「かごめかごめ」「花いちもんめ」「あぶくたつたにえたつた」など3項目であった。

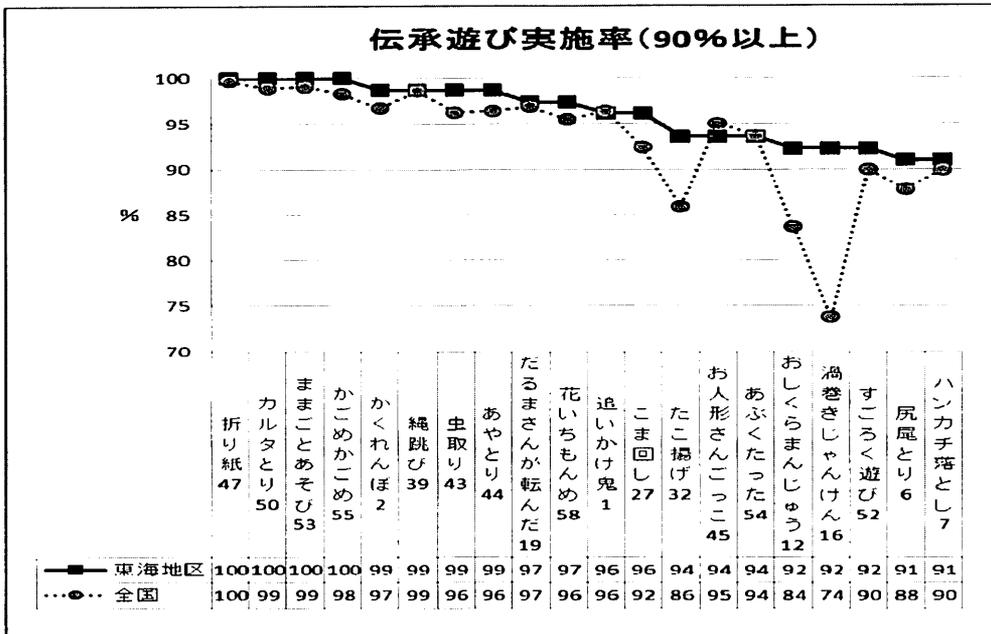


図1-1 伝承遊び実施率(90%以上)

(2) 東海地区における伝承遊び実施率50~89%の項目を図1-2に示した。東海地区は全国と比較して21項目中、13項目で高い実施率を示した。全国と比較して、実施率が低かった伝承遊びの項目は「まりつき」「もちつき」「雪投げ合戦」「ゴム跳び」「砂取り遊び」「腕相撲」「羽根つき」の7項目であった。

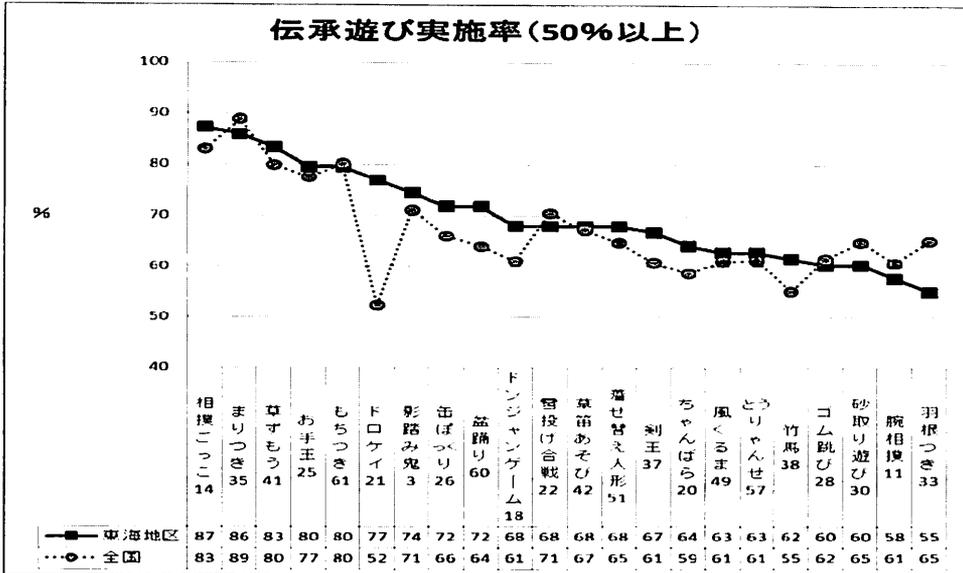


図 1-2 伝承遊び実施率 (50%以上)

(3)伝承遊び実施率が50%以下の項目を図1-3に示した。東海地区は全国に比較して19項目中、11項目で高い実施率を示した。全国に比較して東海地区の実施率が低い項目は、「おはじき」「影絵遊び」「お月見」「ケンケンずもう」「子とろ子とろ」「そり・スケート」「メンコ」「目隠し鬼」の8項目であった。伝承遊びの実施率が25%以下の遊びの中には、戦後、路地裏遊びとして人気のあった「子とろ子とろ」「缶けり」「ぞうり隠し」「メンコ」「Sケン」「石蹴り」「どこ行き」などの項目が含まれていた。

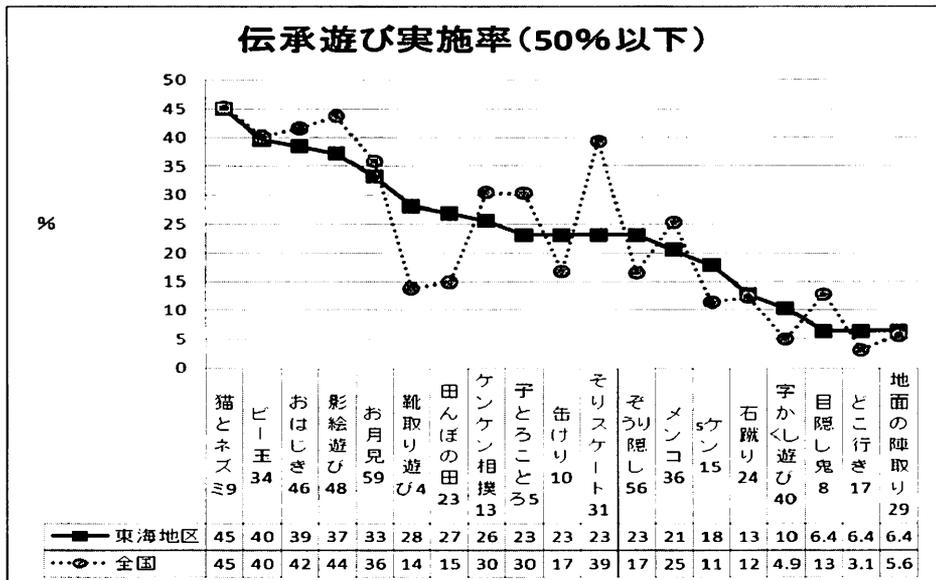


図 1-3 伝承遊び実施率 (50%以下)

## 2) 保育施設における伝承遊び実施状況について

園で伝承遊びを取り入れている比率を表 2-1 に示した。

東海地区の回答数 78 園のうち 77 園(約 99%)の保育園が保育の中に伝承遊びを取り入れていた。園における伝承遊び実施率は全国の傾向と同一であった。

表 2-1 園における伝承遊びの実施状況

	実施率	非実施
東海地区(%)	98.7	1.3
全 国(%)	99.3	0.77

## 3) 園において伝承遊びを実施した動機について

伝承遊びを園の保育に取り入れることとなった動機を表 2-2 に示した。

東海地区では、伝承遊びを保育内容として導入するようになったのは、「園の教育・保育方針によって」としたものが約 55%で過半数を超えていた。次に「保育者の個人的な考えによって保育に取り入れている」は約 33%であり、「行政官庁などの指導によって取り入れている」は、約 8%であった。東海地区と全国を比較すると「園の方針で伝承遊びを導入する」とした比率がやや高い傾向を示した。

表 2-2 園で伝承遊びを導入した動機

	個人的な考え	園の方針	行政・その他
東海地区(%)	33.3	55.1	7.7
全 国(%)	36.4	51.6	12.1

## 4) 伝承遊びをカリキュラムに導入する時期について(複数回答)

東海地区の園で、伝承遊びをどのような時期にカリキュラムに導入をしているのか、表 2-3 に示した。最も多いのは「日常的に遊べるように教材や教具が使えるように準備をしている」が約 87%であった。次に、「保育者が生活主題の中で伝承遊び遊びを紹介する方法」をとっている園が約 53%であり、次いで「伝承遊びと関連する行事を定期的に計画する」が約 24%であった。東海地区では伝承遊びを日常的にそして生活課題と関連付けて実施する比率がやや高い傾向を示した。

表 2-3 伝承遊び導入方法

	日常的	生活主題	定期的行事で	保護者会を計画	その他
東海地区(%)	87.2	52.6	24.4	0	3.8
全 国(%)	84.4	49.8	23.5	3.9	3.7

### 5) 伝承遊びの指導の方法について

伝承遊びの指導方法の結果を表2-4に示した。東海地区では「伝承遊びの内容と方法を保育者が教えて、それを子ども達が実践できるようにする」は約47%であった。その次に、「保育者が伝承遊びの内容と方法を教えて、その後は幼児達がそれを創造的に工夫して遊ぶように心がけている」が約24%であり、次に「保育者は伝承遊びのできる道具や環境を準備し、子ども達が自由に遊べるように心がけている」が約18%であった。

表2-4 伝承遊び指導方法

	指導後、幼児が実践	指導後、幼児が創造的に	道具を提供後、幼児の自由	その他
東海地区(%)	47.4	24.4	17.9	6.4
全 国(%)	45.7	27.0	21.1	6.3

### 6) 伝承遊び道具の準備方法（複数回答）

伝承遊びの道具の準備方法については表2-5に示した。東海地区で最も多いのは「保育者と幼児と一緒に製作し、それを使って遊ぶように心がけている」が約82%であった。次に「既成の道具を購入する」が約78%、「保育者自身が製作している」は約55%であった。

東海地区の保育者はまず、遊び道具を幼児と一緒に製作しようとしているが、作れないものは既成の道具を購入しているようであった。

表2-5 伝承遊び道具の準備法（複数回答）

	遊具購入	行政の支給	保育者が製作	幼児と保護者で製作	保護者が製作	その他
東海地区(%)	78.2	2.6	55.1	82.1	10.3	3.8
全 国(%)	77.6	1.7	54.6	73.2	11.8	6.3

### 7) 伝承遊びに対する幼児の反応

伝承遊びに対する幼児の反応について、表2-6に示した。「非常に興味を持っている」は約72%であった。「やや興味を持っている」は約27%であった。

東海地区の幼児も伝承遊びに対してほとんどの幼児が興味をもっているといえる。

表2-6 伝承遊びに対する幼児の反応

	非常に興味を持つ	やや興味を示す	興味なし
東海地区(%)	71.8	26.9	1.3
全 国(%)	73.6	26.3	0.2

8) 保育者が伝承遊びを習得した方法（複数回答）

東海地区の保育者が伝承遊びを習得した方法について図 2-1 に示した。

最も多いのは「子どものころに遊んだ体験」であり、全体の 99% を占めていた。次に多いのは「職場の同僚から教わった」が 65%、また「書籍や雑誌から学習した」が約 41% であり、「養成校で学んだ」と回答したものは約 21% であった。

東海地区の保育者は伝承遊びを習得した方法として、子どものころに遊んだ体験とそれに加えて、保育者となった後に、先輩や同僚から学習し、書籍や雑誌を読んで習得しているといえる。この傾向は全国の保育者と同様であった。

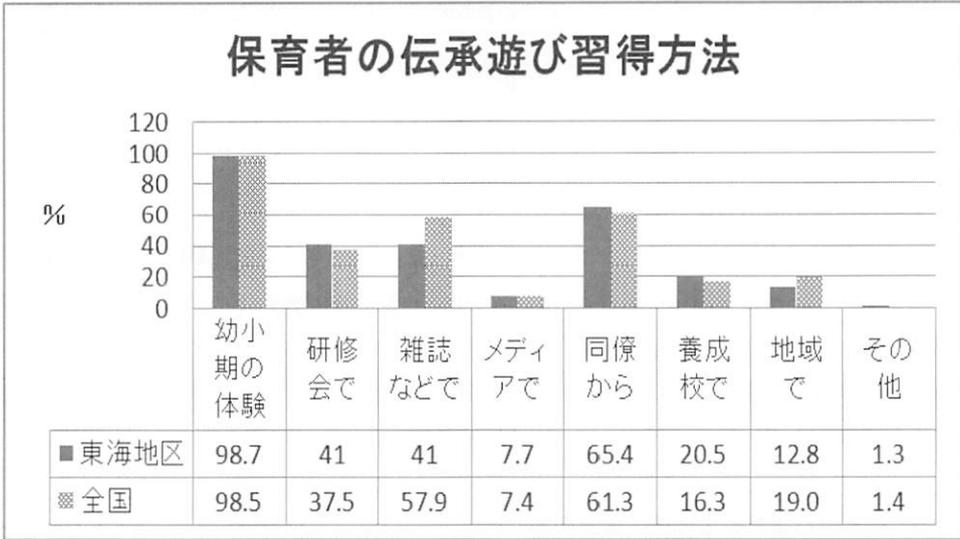


図 2-1 保育者の伝承遊び習得方法

9) 伝承遊びを実施する際の参考資料（複数回答）

園で伝承遊びを実施する際に参考とする資料の種類について表 2-7 に示した。

最も使用頻度の高い参考資料は「伝承遊びに関連した専門書」で約 64% を占めていた。次に「幼児教育や保育関連の雑誌や新聞・テレビの情報」を資料として利用していたものが約 53% であった。「各種研修会や研究会などで配布された資料や報告書など」は約 56% で、比較的多く使用されていた。「養成校等で使った教科書や資料」の使用率は約 19% で低かった。また「インターネットによる資料」の利用率も低かった。

表 2-7 伝承遊び立案時の参考資料

	保育指針	専門書	研修会資料	雑誌・新聞	教科書等	IT 関連	その他
東海地区 (%)	14.1	64.1	56.4	52.6	19.2	2.6	20.5
全 国 (%)	16.3	62.85	49.07	51.86	17.96	2.94	21.98

### 3. 保育者の伝承遊びに関する認識と課題

#### 1) 伝承遊びへの関心について

東海地区の保育者の伝承遊びに対する関心度について表 3-1 示した。伝承遊びに「とても関心を持っている」は約 63%、「少し関心を持っている」は約 33%であった。

東海地区の全ての保育者が伝承遊びに対して、程度の差はあるものの高い関心を持っているといえよう。

表 3-1 保育者の伝承遊びに対する関心度

	非常に関心がある	やや関心がある	あまり関心なし	関心なし
東海地区 (%)	62.8	33.3	1.3	1.3
全 国 (%)	63.2	36.5	0.2	0.2

#### 2) 伝承遊びをカリキュラムに組み込む必要性について

伝承遊びをカリキュラムに組み込む必要性について表 3-2 に示した。伝承遊びをカリキュラムに組み込むことが「必要である」と回答した保育者は約 74%、「やや必要である」は約 22%であった。また「やや必要ない」「必要ない」は約 3%であった。

東海地区の約 96%の保育者が伝承遊びをカリキュラムの一環として組み込む必要があると考えていた。

表 3-2 伝承遊びを保育で行う必要性

	必要である	やや必要	やや必要なし	必要なし
東海地区 (%)	74.4	21.8	1.3	1.3
全 国 (%)	78.1	20.7	0.9	0.3

#### 3) 伝承遊びを保育で行う理由について（複数回答）

伝承遊びをカリキュラムの一環として組み込むことが必要な理由を図 3-1 に示した。東海地区の保育者が回答した最も大きな理由は「伝承遊びが幼児の成長や発達に有効である」とするものが約 89%であった。次に「日本の固有の文化に関心を持って、それを継承するため」と考えているものは約 73%であった。

東海地区の保育者は伝承遊びが幼児の成長や発達に有効な保育教材と考えているとする比率が全国平均よりやや高い傾向を示した。

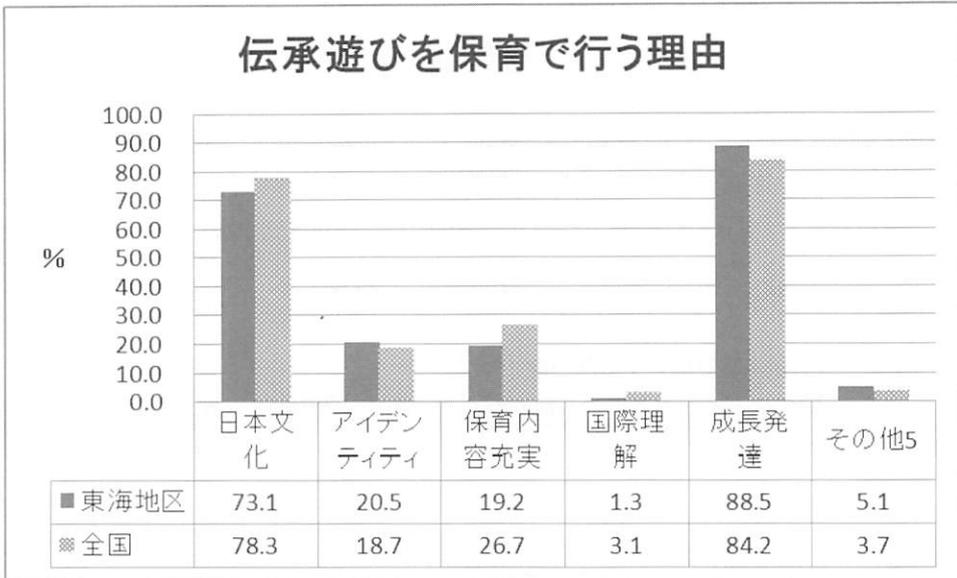


図 3-1 伝承遊び遊びを保育で行う理由

#### 4) 伝承遊びの指導法について

伝承遊びの指導法について表 3-3 に示した。東海地区で最も多いのは、「保育者が伝承遊びの内容と方法を教えて、それで実践する」と考えている保育者が 42%、次に「幼児に伝承遊びの内容や方法を教え、それを基に幼児が創造的に遊べるようにしたい」と回答した保育者は約 39%であった。

保育者が伝承遊びの方法をまず、幼児に教えて、それからの発展を子どもに託すると考える保育者が全国平均に比較して高い比率を示した。

表 3-3 保育者の伝承遊び指導法

	保育者が指導	幼児が創造的に	子どもの自由に	その他
東海地区 (%)	42.3	38.5	11.5	5.1
全 国 (%)	31.3	47.2	14.3	7.2

#### 5) 伝承遊び指導における隘路について

伝承遊びを指導する際に感じる困難さについて図 3-2 に示した。

東海地区の保育者が伝承遊びの指導において最も困難な問題としてあげた要因は「保育者自身の伝承遊びに対する認識が不足している」が約 64%であった。次に「伝承遊びを幼児たちに理解させて伝達することの難しさ」が約 32%であった。両項目とも全国の比率を上回っていた。東海地区の保育者は伝承遊びを日常的にカリキュラムに組み込みたいと思っているが、保育者自身が伝承遊びに関する知識が不足していて、適切なカリキュラム構成が難しいことと、指導において幼児に分かりやすく指導することが難しいと考えていた。

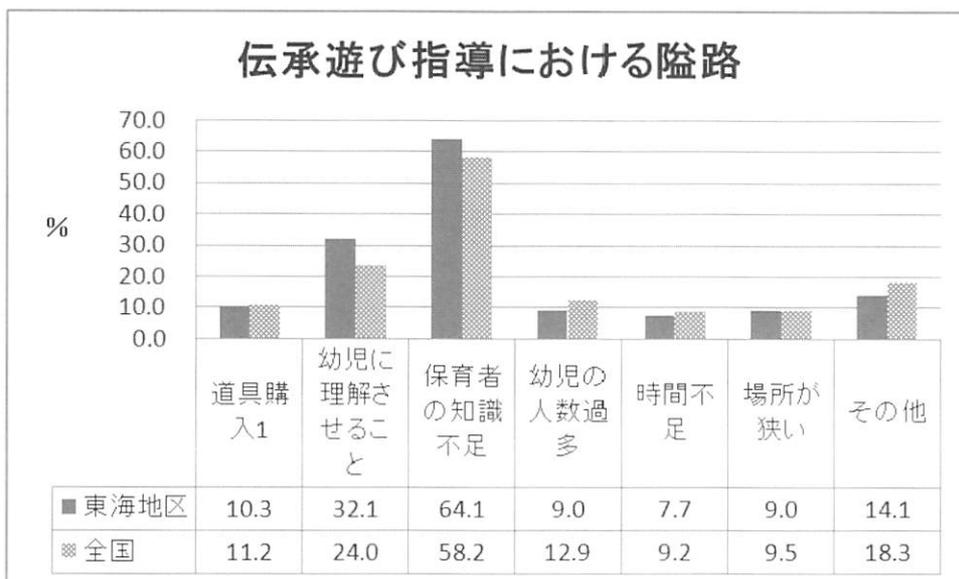


図3-2 伝承遊び指導における隘路

#### 6) 伝承遊びを普及させる対策について

伝承遊びを普及させるために、保育者が考えている対策を図3-3に示した。

東海地区の保育者は「伝承遊びに関する研修の機会を増やす」が約54%で最も多く、次に「養成校で学生に伝承遊びを十分指導する」が約42%であった。次に「家庭と連携して保護者達が伝承遊びに関心を持つようにする」が約40%であった。全国との比較では、保護者教育と養成校における学生への指導を求める意見が多かった。

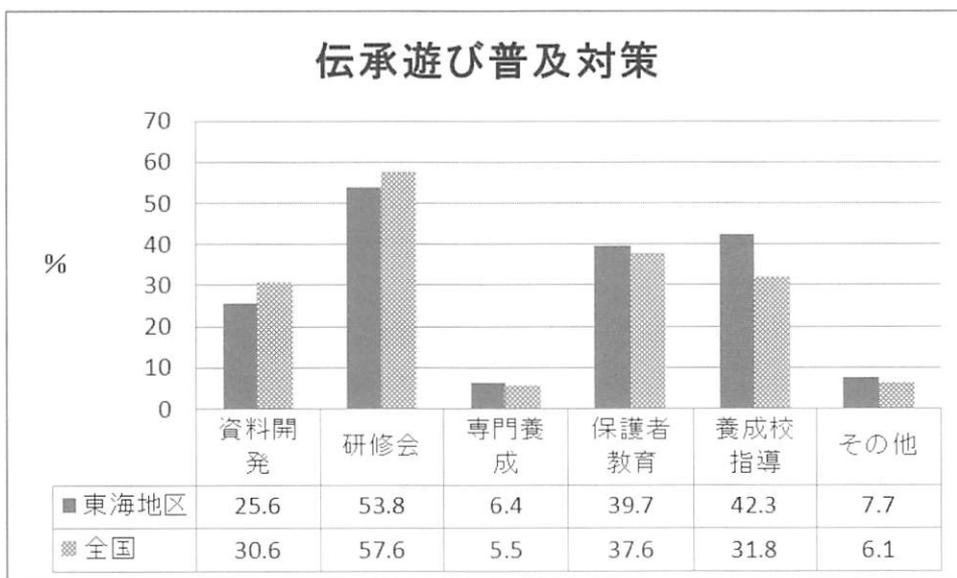


図3-3 伝承遊び普及対策

## V 考察

遊びの文化的価値は、J. ホイジンガ（1963）やR. カイヨワ（1970）によって位置づけられたと言って差し支えない。また、幼稚園教育要領や保育所保育指針においては、幼児の保育内容の中心に遊びが据えられ、保育界では幼児の心身の発達や児童文化の継承に向けて活発な教材研究が行われていることからその重要性は明確であろう。

本調査で言う伝承遊びとは、中地万里子（1980）の「子どもの遊び集団の中で自然発生的に生まれ、代々共有されてきた遊びであり、子ども社会の縦横のつながりによって、また、大人から子どもへの経路を通して伝えられ、受け継がれてきた遊びの総称である。」の定義に基づいている。そして、伝承遊び項目の選択は、増田（1989）、穂丸（2003）、芸術教育研究所（1986）、大林（1998）、奥・ながた（1987）、石原・穂丸他（1989）ら、の文献から幼稚園や保育所で実施されている確率の高いと思われるものと、戦後の路地裏遊びとして記憶に残っているものから筆者らが抽出したものである。

### 1. 東海地区の伝承遊び実施状況

東海地区（静岡県、愛知県、岐阜県、三重県）の伝承遊びの実施状況は、全国調査の結果と同様に、約99%以上の保育所・幼稚園において実施されていることが判明した。

さらに、東海地区の伝承遊びに関する特徴は、多くの調査項目においてその実施率が全国平均より高かったことである。

その理由を探るためには、伝承遊びを保育内容として実施する際にまず、保育計画でどのように位置づけられているかが重要である。

東海地区では園の方針に基づいて実施している園が、全国平均より約4%高く、個人的理由によるものは約3%と低かった。すなわち、保育計画立案段階で伝承遊びがしっかりと保育計画で位置づけられているからであろう。その位置づけの根拠となっているのは、伝承遊びの保育教材的価値として、幼児の成長や発達の有効性で、東海地区の保育者は全国平均より約4%も多くの者がこれを認めている。そして、伝承遊びが幼児にとって興味や関心が高く、幼児が楽しさを味わうことのできる保育教材であるという認識がその背景にあると推察された。

さらに、保育者の年代別の伝承遊び実施得点を図4-1に示した。これによれば、東海地区の保育者は、すべての年代で伝承遊び実施得点が全国の保育者よりも高い値を示した。そして、20代の伝承遊び実施得点は、全国平均より約5点も上回っていた。このことから東海地区の保育者は全国の保育者に比べて、すべての年代において伝承遊びに対する意識が高いといえることができる。

ちなみに、実施得点の最高点は183点（61項目×3）となり、最低点は61点である。

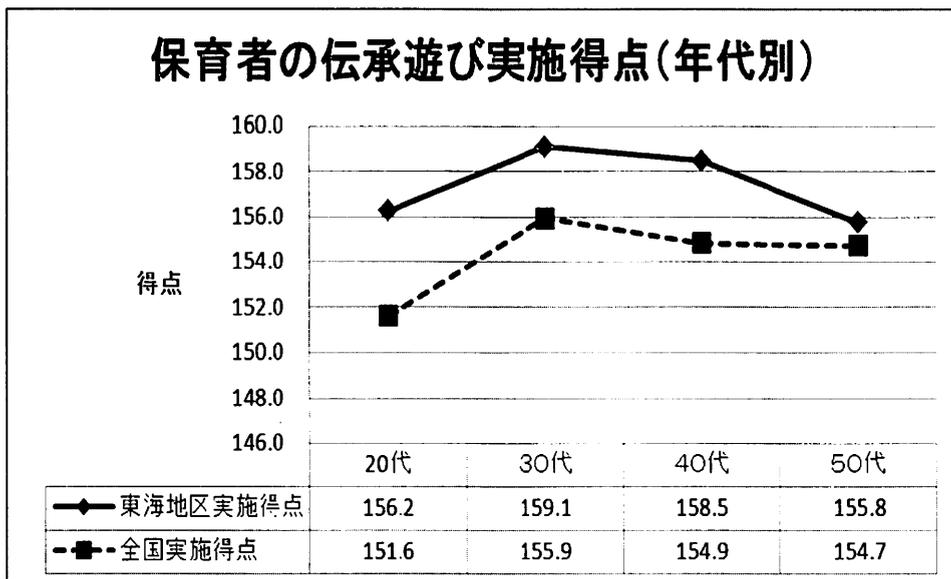


図4 保育者の年代別、伝承遊び実施得点

## 2. 東海地区の伝承遊び普及への課題

保育者の多くは、伝承遊びを幼少年期に習得したと述べているように、幼少年期の楽しい伝承遊びの体験が、保育者となった時に遊びを伝える際の基本となっていることがわかる。しかし、園における伝承遊びの指導の隘路として、東海地区の保育者は約60%が「保育者自身が伝承遊びを理解していない」ことを大きな理由としてあげていた。これは、保育者の伝承遊び体験だけでは幼児の指導においては不十分であり、遊びの持っている楽しさの本質や遊びによって幼児が学習する内容、指導の系統性などについての知識やスキルが不十分であることを自覚した数字といえる。また、40代、50代の保育者による20代の保育に対する評価、あるいは、幼少期の伝承遊びの体験が少ないことを危惧したものでないだろうか。

子どもの伝承遊びは、昭和40年代の高度経済成長期を境に伝承遊びの継続性が著しく低下していることは間違いがない。遊びの継続性を復活するには保育者の力量に負うところが多い様に思われる。その解決方法として、東海地区の保育者の約54%が示したように園内研修を通じて若い保育者のために伝承遊びの楽しさを体験する場を設ける。あるいは、約40%の保育者は職場の同僚から学ぶ必要があると回答しているように、保育者同士の情報交換が重要である。さらに東海地区で多かった意見は、保育者の約42%が、保育者養成校での指導を期待していた。この数値は全国平均より10%も高く特徴的でもある。したがって、保育者養成校における遊びの指導のあり方を検討が求められていると思われた。

さらに、課題として挙げられたことは、昭和30年代の路地裏遊びは全国調査と同じように実施率が25%程度に低下していた。これらの伝承遊びは風前の灯であり、もう忘れかかっている遊びともいえる。しかし、これを逆説的に考えれば、東海地区ではまだ25%の保育者が、路地裏遊び

の伝承を行っているとも解釈される。このようなダイナミックで楽しく、友達同士のコミュニケーションを育む遊びの継続に取り組む活動も重要であると思われた。

児童文化研究者の上 笙一郎 (2005) は、子どもの遊びに関わる江戸時代から第二次大戦直後までに出版された文献を精査して、全 25 巻にまとめて復刻した。その目的は『科学技術の恐ろしいまでの急速な発達とそれにもとづく経済の高度成長による生活の変化は、物質的裕福と引き換えに、<子ども>から<遊びの場><遊びの仲間><遊びの時間>を奪ってしまった。<教育> (知的教養) のみを強要され<遊び> (情緒的開放) を取りあげられてしまった現代の子どもたちは心にも身にもおおきな<ひずみ>を顕して来ていると言わなくてはならない。そうだとすれば、わたしたち大人は、<子ども>たちに<遊び>を返すという必要がありまた責任がある。』と述べている。

すなわち、世代から世代へ縦に受け継がれていく伝承遊びは、不要なものを歴史と時間のフィルターで淘汰しながら、子どもにとって楽しく面白いエキスを子どもから子どもへと伝える。そのような伝承遊びの体験は、子どもの意欲を育て、子どもの心身の発達にとって欠かせない栄養素としての役割を果たしているといっても過言ではない。このような大切な伝承遊びを子どもたちの心身の発達に活用すると共に、児童文化として伝えていく役割は保育者をはじめ大人の重要な課題と言える。

## VI まとめ

結果と考察は以下のようにまとめられる。

1. 東海地区の伝承遊び実施状況は、全国調査と同様、全ての幼稚園や保育所で保育・教育教材として導入されていて、保育者の伝承遊びに対する関心は非常に高かった。
2. 東海地区では、調査した伝承遊び 61 種目の内、90%以上の高率で実施されていたものは 20 種目におよび、全国平均よりも実施率が高く、東海地区の保育者の意識の高さが認められた。また、実施率 25%以下の遊びには戦後の路地裏遊びとして人気があり、ダイナミックな動きを伴った運動遊びが多かった。しかし、まだ 25%の園で継承されているとも解釈され、その灯を消してはならないと思われた。
3. 東海地区の保育者は、全国調査と同様に伝承遊び導入の理由としては「子どもの成長と発達に有効であること」「日本の遊び文化を継承すること」が主なものであった。
4. 東海地区の保育者は、伝承遊びを指導する際の隘路として、保育者自身の伝承遊びに対する知識不足をあげていた。その問題解決策として「保育者の研修会の充実」「養成校での指導」「家庭との連携」などが提案されていた。
- 5 東海地区の保育者の年代別伝承遊び実施得点は 20 代が最も低く、30 代が最も高く、次に 40 代、50 代であった。実施得点は、どの年代においても全国平均よりも高かった。

## 東海地区における保育者の伝承遊び実施状況と課題

謝辞：本報告にあたり、アンケート調査にご協力いただいた全国及び東海地区の幼稚園・保育所の方々に感謝いたします。

なお、この全国調査は韓国・梨花女子大学校幼児教育学科 李基淑氏、畿正愛、暁園大学校 児童学科 鄭美羅と共同研究で行われ、調査に必要な研究費は韓国からの支援によって行われたものであることを付記し深謝いたします。

### 【参考文献】

- 穂丸武臣編著（2003）幼児の心身を育てる遊び，圭文社，東京。
- 穂丸武臣，丹羽孝，勅使千鶴（2007）日本における伝承遊びの実施状況と保育者の認識，名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』7号。
- 穂丸武臣（2010）伝承遊びの実施状況と課題-園種・設置形態による比較-，名古屋経営短期大学紀要第51号。
- 芸術教育研究所（1975）伝承あそび12カ月，黎明書房，名古屋。
- 芸術教育研究所（1986）伝承遊び辞典，黎明書房，名古屋。
- 半澤敏郎（1980）童遊文化史 第1巻，東京書籍，東京。
- 石原花子・穂丸武臣他（1989）保育内容に関する総合的研究，名古屋市立保育短期大学研究所研究紀要第26巻。
- J. ホイジンガ（1963）ホモルーデンス，高橋英夫訳，中央公論社，東京。
- 笹間良彦（2005）日本子どもの遊び大図鑑，遊子館，東京。
- 上笠一郎（2005）日本の児童遊戯全25巻，クレイス出版，東京，p3。
- 中地万里子（1980）伝承遊び，平山宗宏編 現代子ども大百科，中央法規，p568。
- 奥成達・ながたはるみ（1987）遊び図鑑，福音館書店，東京。
- 大林太良（1998）民族遊戯大辞典，大修館書店，東京。
- R. カイヨウ（1970）遊びと人間，清水幾太郎・霧生和夫訳，岩波書店，東京。

（名古屋経営短期大学子ども学科 教授）